HQ 1104 + J74

Aug 25 1888 No 124

明治廿一年 (第百貳拾四號) 八月廿五日發

社説
女性の朋友

論説
家内經濟の大要（木村熊二）○妻君の資格（紅雨亭一枝）

批評
女學雜誌前々號の社説○音樂早學（美妙齋）○島地默雷氏男女關係論

叢話
赤子の吼く事（船越鼎太郎）○西洋の御轝かつき（美妙齋）○一唱百歎

小説
哲女の巻○さすがに双紙○小説神髄

佳傳
貞實なる未亡人

寄書
新日本詩人の論を讀む（柳園主人）

小供談

新報

外報

Digitized by Google

Original from CORNELL UNIVERSITY

The Woman's Magazine.

(JOGAKU ZASSHI.)

No. 124. August 25th, 1888.

EDITORIAL:— Woman's Friends.

LEADING ARTICLES:— Principles of Houshold Economy: No. VII, by Rev. K. Kimura; True Character of Wife, by Koutei.

CRITICAL NOTES:— Reply to Criticisms made on Last Editorial; A Short Method for The Study of Music; Relation between Men and Women.

MISCELLANIES:— What the Children's cries indicate; Occidental Superstition Golden Dusts.

NOVELS:— "Tetsujo no Maki;" "Sasugani (VIII);" "Bouquet of Novels."

BIOGRAPHIES:— A Virtuous Widow.

CHILDREN'S COLUMN.

GENERAL NEWS.

通信女學の廣告

一冊枚數七十頁
定價廿錢全國無郵税

去十五日出版せり

通信女學第拾貳巻發兌

蓋し最良の教科書

婦人會員の會讀及戸
内の獨學に適せり

●昔時の女子（其三）

簑笠庵主人

○善きことをせんとするは最も難し只悪しきに移るまじとだに心を附ぬるこそ執行なれ執行はいつまでといふ限なし身を終るまでするを執行とすわけて婦女子等は己れが一箇の料簡をもて身を立んことをはかりて其親々の敎ゆる手かき物縫ふことなどをば後にして音曲遊藝を習ひつるを捨置くは親兄弟の過ちあり是は人を便りとせざる育てやうにて縫ひつむぎの道をしらざれば女の性を失ふその智男より少きもの故己れを耻ぢてよろづ嗜むことを專らとせざれば人倫にはづれたる振舞出て來れり去ればをのれ發明たりとも包み隱くして人の發明を常の鑑として身を守るべきものなり。（雲萍雜志）

○親は己か慈悲の及はさるを歎き子の不孝なるを諭すべし夫は妻の不貞を歎かすして己れか和の及はさるを歎くへし妻は夫の不和を歎かすして己か不貞なるを歎くべし。（同上）

○或人菅神の作なりとて見せぬ眞僞はしらずと梶野氏の話」家は金殿にあらずとも漏ねばよし衣服は錦にあらずとも暖なればよし食は珍膳に非すともひもじからねはよし妻は貌に色なくとも賢なればよし。（三省錄）

Digitized by Google

Original from
CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌　第百廿四號　明治二十一年八月廿五日發兌

社説

○女性の朋友

昔し、管仲夷吾、少うして鮑叔牙と交わる、鮑叔よく管仲が賢なるを知りて、終りに至る迄で之を好遇したり。左れば後ちに管仲が申したる語バに、吾れ始め困しき時、嘗て鮑叔と商賣したるが、財利を分つに吾れ獨り之を取りたり、然るに鮑叔ハ我を以て貪ぼれりと爲さず、我が貧しきことを知れるが故なり。吾れ嘗て鮑叔の爲に事を謀りたるが、反つて更らに窮困したり、然るに鮑叔我を以て愚なりと爲ず、時に利と不利とあることを知れるが故なり。吾れ嘗て三たび仕へたれども、三たび君に逐ハれたり、然るに鮑叔吾を以て不肖なりと爲ず、我が時に遭はざることを知れるが故なり。吾れ嘗て三たび戰ひたれども、三たび走りたり、然るに鮑叔我を以て怯なりとせず、我に老母あることを知れるが故なり。吾れ嘗て召忽と共に公子糾に事へたるが、召忽は難に死し、吾は幽囚されて辱めを受けたり、然るに鮑叔我を以て恥ちたりとせず、我れ小節に羞ぢず功名の天下に顯れざるを恥とすることを知れるが故なり。我を生むものは父母、我れを知るものは鮑叔と。後ち鮑叔病ひす、管仲食せず、曰く天下我を知るものなし」と、吾人此傳を讀む毎に、常に感泣して止まず。

實に世の中に、朋友ほど慕ハしきものハなく、亦た好き朋友を得たるほど樂しきものは決して無い。抑も朋友とは、血肉に縁らず、情慾に由らず、權勢に依らず、直ちに其の靈と靈とが結び付けられて、何如に離れんとするとも離るゝこと能はざるに至つて、初めて眞の交際に達したるもので、苟くも此の交際に達したる上は、其喜び、其幸福、果して何如ばかりぞ、天下之に比するものは實に尠ないことである。左れば、世は何如に亂るゝとも、人心は何如に分るゝとも、古今の歴史は何如に拭ひ消す可からざるの汚濁を以て充滿したりと雖ども、其間だに、亂すとも亂れず、分かつとも分れず、燦爛として實に玉の如き光を發する、彼立派なる交際なきにあらず。吾人之を見る毎に、いつも人間が萬物の靈長たることを確信し、其温たる愛情の何如なる境界の下にも決して消えざることを確認して、毎度自から大ひに慰さむることである。故に彼の管仲鮑叔の交らひは言ふを待たず、雪ふる朝た忽まち戴安道を思ひ、月さゆる夜急かに赤壁友を慕ふの類、其の情の何如に美

なるぞ、其他、杜伯殺ろされて之に死するの左儒、終身相倚つて國を護るの廉頗藺相如、もしくは、魚の如く水の如き玄德孔明より、桃園に義を結びたる玄德關羽張飛の類ひ、又は彼のジョナタンとデービドの如き、ゲーテとシーレルの如き、もしくはエヂソンとスチールの如き、近くは彼のコブデン及びブライトの如き、皆な何如に其交わりの美しく且つ淸きぞ、吾人輾轉之を思ふて實に禁ずるあたはず。

然るに、酒あり肉あれば朋友あり、酒なく肉なければ朋友なしと歎じたる如く、世には何故ぞ左樣に朋友なきヿを歎ずるもの丶多かる。古來人間は社交の動物と云はれたり、凡そ生きとし生ける人類にして誰かは其交はる所ろの友人なからん、然るに其多く交はる所ろの友人にして、實に眞正の朋友と稱するもの丶斯く迄に尠なきは何故ぞや。交際會は至る所ろに在り、談話會は至る所ろに在り、俱樂部、親睦會、無禮講、亦た至る所ろに在るが如し、而して其の交はりとは、只だ手を握るに在り、ピョコ〳〵と點頭するに在り、飲むに在り、食ふに在り、强ひて君、僕と呼かくるに在り、時として玉を突くに在り、亦た時として踊るに在り、而して其外になし、嗚呼今の交際塲の朋友なるものは賴母しからざる哉。

然し、男子の方々の中には、倘ほ思ひの外よ朋友と稱すべきものあり、隨分に男らしき交はりを致し、生死相約し、艱苦相盟ひ、切るとも斷つとも離れざる如き立派なる交際の隨分に之れ有るが如くなるに、さて〳〵悲しきは女性の間だ柄にてある、吾人もし大胆に一言すれば、日本の婦女子に朋友なしと、申して不都合なきほどの景況である。」尤も是は無理ならぬことにて、今まで女同志の附合と云へば、先づ親類緣者の行通ひの外なし、少かきとき女學校に入つたる覺もなければ、固より亦た同窓の友と云ふはなし、(今日にてこそあれ)昔しは女が交際塲よ出づるヿなければ、固より亦た他家の御婦人方とお話しするヿもなし、例令ひ又親類緣者行通ふとも、先づ盆正月節句のお見舞ひ、もしくは火難盜難水難の見舞ひ、或は出產死亡くやみ祝ひの折節に於て、只だ儀式計りに顏を出し、お定め通りに頭を下げ、只管意味もなきお世辭を呈してヲホヽと笑ふの外なきヿなれば、是迄には無論女方に交際あるものなかりき、隨つては亦た無論朋友と云ふべきものなかりしが故に、其の結果風習の今日に及ぼして、扨ては今に於ても倘ほ女方に朋友なきものかと思はる、然らば之れ尤もの事にて、敢て無理ならぬ因果ぞと斷念するヿである。

然る所ろ、女方に朋友の出來ぬは、未だ必ずしも右一條の理由にのみ由るにあらず、他に甚はだ申しにくき更らに一箇の情實あるの故とは知らる。吾人は職業上のお蔭を以て、隨分に多くの女方を存じ居り、亦た毎々女方の多く集まらるゝ所にも參り合ふとなるが、茲に男性の眼に映して不思儀千萬の次第ありと申すは、最初吾人が右樣の女方を窺ひ見て密かに其交際の摸樣を拜見したるときと、一つ其外面を立割り一段奥に通つて之が內部を吟味したるときと、其交際の性質に非常の相違あることを見出すの一事にてある。左れば物慣れぬ男子が初めて婦人方同士の交際を見れば、其の物言ひの互ひに親し氣なる、其談話の最と濃やかなる、出るには車を同ふせざれば大にスネ玉ふとあり、入ては席を列せざれば甚はだ御不滿足あるのみか、時には洋服をヲソロヒにしたり、時には頭上の花のかざしを一對にしたり、恰かも是れ骨肉の如く、眞の姉妹の如く見ゆるに拘はらず、明らかに双方の內情を窺ち見れば、尙ほ彼と此と劃然として相區別し、共に決して知らしめじと云へる一部分の思ひが隱れて在る。故に如何に談話は濃かなりとも、何如よ打明くるとは打明けたりとも、此の殿中の殿は決して開かず、固たく閉ざして相ひかくすとである。」抑も之は何故であるか、或人は之を嘲けり、此は女性の邪推深きに由ると申し、又或人は、此こそ女性が人を信ずるの情に乏しきゆへと申す、然し之は何れも皆な女性の氣質を心得んもの丶議論で、其實際は決して否らず、先づ其の否らざるの證據には、彼程に其一事を朋友に秘さるゝ所の女方は、然らば何人にも之を現はさゞるかと云へば、敢て然らず、之は只だ女性の朋友にのみ隱くすとであつて、男子の知己に對しては悉く之を明かし、時には其相談を煩はし、多くは之に委任して甚はだ滿足さるゝが如く見ゆるに由て、之を知るとである。」左れば今の女性は、大切なる事件に付ては、其の同性に信を置かず、反つて男子にのみ信用を置かるゝと云はば、今日日本婦女子に女の朋友なきは、亦是れ其の相信ずるとの足らざるに由ると云ふべきと明白なり。

左らばとて、女性は素と互ひに朋友の出來ざるものにはあらず、其の愛情の深きとは男子よりも深し、其の信任の強きとは亦た男子よりも強よし、其の同感の情に富める、其のナサケの思ひに切なる、其の愛するもの丶爲に犧牲たる決心の熾なる、何れも亦た男子の決して及ばざる所なり、而して此等の性情は皆な良好の朋友を造るに於て尤も必要の氣質なるが

故に、此の氣質に富みたる女性双方が相交際するに於て、何條清き、愛ふかき、最と美なる所ろの朋友の出で來ざる道理あらんや。見よ、彼の谷間の貴婦人を見よ、パットレル姬は貴孃と爲り、ポンソンビー娘は奴と爲り、家族を離れ、社會を離れ、相脫してルランゴーレンの谷間に隱くれ、茅屋草庭、僅かに几上に書籍、庭前に蔬菜あり、則ち松風の琴、鳥の音樂を聞きて、樹陰人なきの地に兩友相ひ和樂して一生を送つたる例しもあり、若くは、リカミア夫人デステール夫人の如き、若くはマリエアントイチッテ及び皇女ラムバーレの如き、又はローランド夫人及びカチットの姉妹の如き、古今尤も高尙なる女性の朋友なきにあらず、其の交際を彼の管仲鮑叔等の間柄に比ぶるに、吾人は敢て其の相違したる所ろを見ざる程である。然らば則ち、今の日本の婦女子に同性の朋友なきは、其の決して出來ざるにあらず、尙ほ未だ出來ざるに由る、寧ろ爲しがたきに非ず、反つて自から爲さゞるに在りと思はる、而して其の朋友なきの最大元因に於て、女性其の同性を信せざるに由るてありては、何如に姉妹方御自身の恥辱にてあり、何如に日本女權の伸張に害あるとにてあるか、婦女諸君が尤も顧みられねば成らぬとである。

嗚呼朋友なる哉、朋友なる哉、吾に一つの鮑叔を與へよ、吾に一のポンソンビーを與へよ、然らば吾等何如に樂しく何如に幸福ならん、朋友は酒食の友にあらず、權勢の友に非ず、彼は皇帝の位にありとも笑つて共に寢ねて其腹上に足を載せん、彼は貧賤の下にありとも喜んで共に車して其の手を握らん、吾靈彼れが靈を愛す、吾心彼れが心ゝ合したり、天の結び合せたるもの人何如にして之を分たん、歡喜困厄ともに相携へて膝膠の如くならんとは眞正の朋友を求るものゝ眞情であらう。世上の姉妹諸君、須らく先づ相信じ、次に相愛し、深く結納して眞の朋友を造れ、豈啻に諸君が幸福の大なりとのみ云はん、之に由りて諸君が大恥辱は除かれ、之に由りて諸君が地位大ひに進步するの結果あるべし。

ナポーレヲン云く、

友情とは只だ名目のみ、朕誰をも愛せず、朕が骨肉をも愛せず、ジョウセフの如き、蓋し只だ少しく之を愛する耳、但し朕が彼を愛するは、其の兄なるに由り、亦た年來の習慣なるに由る、デウロー、アー然り朕亦た彼を愛す、但し何故ぞ、之れ只だ彼が品德の朕を喜ばすに由る、彼は冷淡なり、沈默あり、決斷あり、朕は信ぜず彼未だ一滴の涙を落

さず、朕只だ之を愛するのみ。朕の如きは實に、一人の眞友なし、然り固より朕斯くして在らん間だは、朕が好むまゝに數多の僞わりの朋友はあるべし。然れども感情は女子の受持なり、朕之を婦女子に托す、大丈夫須らく心確固に、期望堅固にあるべし、然らずんば戰爭と支配とに於て能く何事をか成さん。朕もとより愛らしくなし、然り固より愛らしくあらし、然れども嘗て愛らしくなかりしと雖ども、而も朕は今ま正しくある。

此の皇帝、末期、セントヘレナの孤島に在り、一望水天遙かに髣髴たり、波濤松籟に和して、命數殆んど絕つ、時に彼れがナザレ村の一孺子に慷歎したるの情果して何如なりしぞ。撒母耳書に曰く、

ダビデ、サウルに語ることを終へしとき、ヨナタンの心ダビデの心に結び付て、ヨナタン己れの命の如くダビデを愛せり。

嗚呼、此の語それ何如に美なるぞ。

關羽劉夫人と共に一室に寢す羽嫌を避け燭を執り侍立す天明に至て肅々として君父に侍するが如し

論說

○家內經濟の大要（其七）

木村熊二

或る紳士一日余に語りて曰く子が近日家內經濟とて女學雜誌へ投書せられたるを見るに餘り綿密に亘りて吝嗇に陷らしめんとするの弊あり馬琴の夢想兵衛か貪婪國の悋鷄に擒れて吝嗇郡守錢城におろされたる心地せり吾子の說の如きは恐らくは吝嗇守錢の弊害に陷らんのみと余謹んで之に答て曰節儉と吝嗇とは其間に霄壤の差異ありそは誰にても見易き事よなん節儉とは奢侈に流れず日々の浪費を省き殘餘を貯積し資本へ入れて將來の財產を繁殖し社會に獨立の人たらん事を計畫するにあり所謂後を慮るの感覺よりして生する者なれは徒に金錢を貯るを目的とし身分相當の快樂をもとらす他人の幸福の爲めには一錢をも費さす流離落魄世に憫むへき人の淚を拭ひ一片の慈悲を灑ぎて煩悶に堪さる心を慰むるの念なき藪坂吝平無佐堀皴右衛門の類をいふにはあらさるなりシセロ曰儉は自主の母なりジヨンソン曰儉は安靜の基礎たるのみならす亦仁善の基礎なりと今や自己の浪費を省減して一家の平和安全を計り之を以て他人の窮苦を救ひ社會の文明を補はは私慾に殉ひて入金の如何を問はす之を費し盡して終に負債の苦海に沈

みて屢他人に哀呼するよりは萬々まさる所あらん米國ニーシエルシー、ニーブランスウィッキに有名ある圖書館ありセーシライブラリーと名くこはカルシナル、セーシといふ紐育の商人が私金を抛ちて建設せし所のものにして構造の美麗圖書の富は實に驚く可きなりセーシは南北戰爭の時に戰功ありし人なるが爭亂收りて後商業を勉强し非常なる節儉を爲して終に巨萬の富を致したる人あり余が面會せし時其の人衣服も左程美麗ならす出るに馬車に乘らす老たる一箇の田舍漢と思ひたる程なりきセーシ微なる時人々常に吝嗇家と思ひ居たりしが晩年に妻兒の日々を快よく生活し得べき程の金を餘し置て自他の金は悉皆此の圖書館と神學校へ費して衆人の益を計りたりされは今日那の圖書館へ來る者氏か趣向の高尙なるに感歎せさるはあし一人一家の節用社會の幸福に影響を及す事如此儉は仁善の基礎といふも決して虛言にあらさるなり余昨年上州地方を漫遊せし事ありしかその地に一の富豪あり家に萬金を累ねたりしと然るにこの人や夜は柝木と提灯を携て金庫の前に徹夜し晝は十露盤と帳面とを坐右に置きて見世先にあり累々として喪家の狗の如く慈善の爲めに一錢も費すとなく公衆の益とは何等のとなるか全く了解せざる樣なり佛に佞して自己の幸福を祈る外爲すへき業なし又原市にて一老人と知己になりたるとありこの人其の始めは小切れを賣りたる人なりしが節儉と勉勵とにて非常なる富を致し學校建築に獻金し又た私金を抛ちて基督敎會堂を建設し慈善の事なれば惜む所なく金錢を出したりこはかの地方の人々の能く知る所なり看官もし節儉と吝嗇とを明らかに辨せんと欲せは余かこゝに記せし人々の行爲を比較したまへかし節儉を守らんとて隨分可笑しき所業に陷るとあればこゝに注意を乞んと思ふなり頃日余腦充血の病にかゝり在床せしに或人來りて病を問ふて曰君の病は一刻も差置がたし宜く百事を抛ちて山水幽淸の地へ入浴したまへかしと其後余か病いよ／＼重くなりたる頃又來りて曰君は我か助言を用たまはぬが故にかくなりにき此度は海水浴へ行たまへ又日洋食こそ必用なれは必す用ひたまひねと余は其懇篤には感じ入たれど如何せん半月餘も病床にありてなか／＼務におこたりたれは囊中自ら空しく函山の淸泉に俗耳を洗ひ磯海の潮水に病躰をひたす事を仰望せさるにあらす左り迚渡る瀨に橋てふもの丶なき心地してかはとのみ見て行を得す打伏いたり旅費を周旋せす料理店に伴はす口頭にて入浴と西洋料理をすゝむるは甚た儉約なる御馳走と近頃感服

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

いたしたり余がいふ節儉とはかゝる類をいふにはあらず衣食藥餌に必用をかゝざる人に一箱の菓子だにも贈り御愛想を呈するには及ばざるなり毎日の需用に差支なく金錢にても衣食にても贏餘あれは之を困窮なる人に與へて衆と樂を共よし又自己も奢侈に陷らず無益の事に浪費せず應分の快樂を得て生涯を送ると言ふなり醫師サウスウード、スミッス曰快樂を受用するとは人世の目的なるのみならず壽命の有らん涯りは伴ふて離れざるものなり」と左れは人々か節儉して財を殖すも家內眷族擧て幸福なる生涯を送り高尚なる快樂を得んと望むなり貧富の差別によりて安樂の鄕は各異なりといへとも人世快樂なくして一日も生活し得へきものにあらず故に苦中にも必ず樂處を設けて自己の精神を養ひ酸辛を忍耐して勞働を爲し或は苦み或は樂み日一日を送るものなり晝は終日田圃の勞働も夕がほ棚の下すゝみ夫婦心におもふこともなく門涼したるさまはいかに樂しかりけんと西行上人も言たりき妻たるもの一家の經濟を擔當して良人をして日々其の職業に勉强せしめ自ら省て心に耻る所なく家內凡百の事整然として秩序あり食に八珍の美なく衣に華麗の飾なくも饑寒困窮の大敵を免かれ心意安逸にして兒童は膝を回りて唱ひ自己は良人と相對して編物に忙手し負債の責は外より來らず不平の言辭は內に發せざる生涯を良人は柳橋に醉を買ひて他の明月淸風を弄ひ心のたけやの波を越てかはらぬ色の八百松に賓主相對して語なく隣樓の絃聲に「さてはかなさよ」と感じたり細君は今日も交際とて家にあらず假令家にあるも手を空しくして終日爲す所なく兒子は遊嬉に耽り奴婢は當座の愛想のみを事とせり家內冷淡なるこの生涯に比較せは學問は等輩に優れずとも美術は左までに學ずとも愛と誠に充ちたる心ある家內經濟に長し節用整理の法に熟したる婦人こそ男子に必用なる伴侶にして必ず自己の家を安樂の鄕となして男子をして他に快樂の地を求め鬱を散じ悶を遣るの感覺を生せしめざるなり(未完)

○妻君の資格

紅雨亭　一　枝　演舌

諸君昔希臘に一人の書生あり當時の Phylosoph Theophrastus に問ふて曰く余の此世に在るや嘵々多言當に阿房鳥の如くならんか口ゆへ惡まるゝを如何せん默々當に石地藏の如くならんか口の動くを如何せん先生願くは生に敎ゆるに嘵默の道を以てせよ先生曰く汝賢なれは當に嘵々すべし賢にして默々すれは己が固有の價値を發揚すると能はず然れとも汝愚なれは當に默々すへし愚にして嘵々するは己が胸中の無一文なると

を人に披露するものなりと余か今諸君に向つて口を開くは敢て余か固有せる價値を發揚せんか爲に非らず固より余か胸中の無一文なるとを諸君に披露するは余の自ら知る所なり而して何ほ喋々する所以のものは余豈に辨を好まんや止むを得さればなり諸君獨逸の諺を知らすや Schweigen ist Silber, Sigen ist Gold（默するは銀にして談ずるは金なりと）余は銀を措て金を取らんと欲す。

閑話休題余は今日諸君に披露するに余か最も愛敬する後來の細君を以てせんとす否余は後來吾人青年の共に事を爲さんとする所の細君を畫かんとす此く言はば諸君は余を以て好色家なり多情家なりと批評するならん余は好色家あるか將た多情家なるかを知らず然れとも余は Ein grosser Freund von Frau（大なる好女家）なり諸君何ぞ笑ふを要せん抑そも吾人の共に社會を組織する所の者は果して何物ぞ山川か草木か將た禽獸か是皆然らず吾人の共に社會を組成する所のものは獨り温柔可憐の婦女子諸君に非らずや然らば則ち苟くも社會の基礎を維持し人類の幸福を增進せんと欲する者にして豈に婦人を愛せずして可あらんや豈に婦人を好まずして可ならんや否人間の義務として彼を愛せさる可からず人間の天性として彼を好まさるを得ず而して此愛好の心たるや已婚者は固より未婚者に於ても大に其必要を感ずるなり若し未婚者にして此心なきときは男子は男子なり女子は女子なり吾豈に彼れを顧みるを要せんやと彼此痛痒相感せず男子が女子の不德を見、女子が男子の無智を見ること恰も對岸の火を望むか如き感なきに非らず而して其一たひ結婚の一大義務を行ふや互に配偶者の不足を嘆するに至るや必せり是其始めに於て男女の運命は互に相固着して離隔す可からさるものなるとを知らさるに因らずんばあらず是を以て一生の最大幸福と最大快樂とを得んと欲せば未婚者たる者は宜しく後來其配偶者たる可き者の心情擧動に注意して其進む可きは進め改む可きは改めさる可からず而して是實に眞に相愛するの情なくんば決して十分なる注意を惹起するものに非らず演劇嫌の人は共に團十郎菊五郎の藝を許す可からず餅好は共に葡萄酒麥酒の善惡を談する能はず然るに天保の藥罐連は青年輩にして婦女に關するの談を爲す者を見れば彼は不品行なり彼は淫亂なりとて之を蔑視するに至る余其理の存する所を知らさるあり然れとも彼等は已に其藥罐中に數十年來頑固の水垢を貯蓄し其厚くして堅きと石灰質の殻の如く如何に文明の道理を以て之を刺激するも感

するとあく如何に之を洗滌するも去となし此の如きの言を爲す亦た宜なる哉然るに文明の時期に生れ泰西の書冊を繙き博識高才を以て稱せらるゝの人にして往々藥罐連の亞流となり公然人に向つて大丈夫何そ一少婦人を愛せんと（其心中ハ知らされとも）言ふ者あるに至てハ余殆んと驚愕の至に堪えさるなり尤も世界の廣き人間の衆き或ハ婦女の愛を誤用して世上の毀譽褒貶をも顧みず天然蛟龍の資を具へながら空しく雲雨に後れて蹈の笑と爲るものもあらん質置き八置き七處借り「トヾ」の詰りハ掠奪主義と出掛け遂に監獄署の御厄介となる頓痴鬼もあらん或ハ天にも地にも掛替の無き唯た一ツの命玉をして遠慮惠釋もあらばこそ一瞬間に吾妻橋下の水烟と消えしむるもあらん或ハ「モルヒ子」出刄庖刀の悲劇を演出するもあらん然れども是啻に婦人の世界に勢力を有する所以を知る可くして未た以て婦女を愛す可からずと之を換言すれハ婦人を恐る可しとの理由とするに足らず余は之を説明せんが爲に今諸君に語るに一水夫と一商人との對話を以てせんとす曾て一商あり水夫某に問ふて曰く君ハ尙ほ父を有するか曰く否曾て水に溺れて死せり又問ふて曰く君の祖父ハ如何ん曰く彼亦た水に溺れて死せりと商人乃ち驚て曰く已に父と祖父とを水中に失ふ而して尙ほ水を恐れざるか水夫笑て曰く君の父ハ如何ん曰く已に此世にあらず然れども天幸を以て臥床の上に終れり曰く祖父は曰く亦た天幸を以て臥床の上に此世を去れり水夫曰く可あり君ハ已に父と祖父とを臥床の上に失ひしに非らずや而して尙ほ夜々臥床の上に眠るとを恐れさるかと諸君若し水夫の言を味はゝ世に多少婦女の爲に身を誤るの男子ありとて決して婦女を恐るゝに足らさる知る可きあり Geld und Frauen regieren alle Welt（金と女ハ全世界を支配す）と婦女の勢力ある此の如し豈ゞ默々に附す可けんや。（未完）

陳無己は門を閉て句を案し、少游は人に對して筆を揮ひ、西行はうそふむきて詠み、和泉式部は引かつぎて詠み、スペンセルは園内を歩み作ら綸を立て、スカツトは雨に打れて種を作る。

批評

○女學雜誌前々號の社説

第百二十二號女學雜誌社説の第二に「遊廓の開業式總理大臣以下を招待せんとす」と云へるに對し、或る雜誌は長々しき批評を下し、決局左の如く申したり、

有社説の最后に「啻に之を明記して三千八百萬の同胞に訴ふるは勿論更に之を評して歐米外國の諸新聞紙に公告することを猶豫せざるべし」と斷言せられ

たりア、此れ何言ゞ國人相愛して其美を顯はし其惡を掩はんとするが如きの情愛は記者の保存（國粹として）せんとする限りにあらざるか我等は此點に於て記者の心底を測り知るに苦しむ也。

吾人は日本國を愛するものとして、只だ其美を顯はし惡を掩はんと爲さず、専ばら其實美を增さんことを希願す、而して當今の弊風を矯正するに尤も有力なる法方の一は、即ち此の弊害を曝露して可成廣く世上に公告するにあるを信ず、國民誰れか外邦に其國美を顯はすことを願はざらん、之を願ふが故を以て、其の國弊を外邦に曝露するは即ち此の弊を矯正するの功を爲すのみ、明治の愛國者は須らく大胆なるへし、お化粧主義、白堊主義の人、何すれぞ能く大弊害を矯むるを得ん、少くとも先づパルマルバジエット記者位ひに大胆なれ。」

彼の雜誌に又云く、

然れども此一句こそ或は記者が精神の存する所ろに非ずや何んとなれば記者が歐米の人士を愛するの深き我同胞を愛するの深きに讓らざるは記者が平生の言論に於て我等の能く知る所ろなれば也即ち是れ思ひ内に在れば外に顯はるゝものにあらずや。

吾人が頭には西洋人日本人の區別なし、何れも人類として均しく之を惣愛する也、然れども箇々が其の箇々を特愛するは人類惣躰の大發達に必要あるが故に、即ち吾人は一身を愛しホームを愛し、故鄕を愛し、日本國を愛するのみ、左れば吾人が胸に於て日本國民を愛するの愛は敢て他人に讓らず、獨り無用の慷慨悲憤切齒扼腕を爲さゞるぞ其差ひあらん。吾人は日本人也、日本を特に愛するもの也、日本の爲に特に盡力するもの也、左れば女學雜誌を大日本帝國東京日吉町に於て、御覽の如く日本文字にて發行いたす。

〇音樂早學び

（横綴小本一冊奥山朝恭梅田磯吉兩氏合著　東京神田宮本町叢書閣發兌）

美妙齋主人述　おぼろ月　記

西洋樂曲の次第を說き、日本俗曲よ之を應用した、近頃めづらしい書物です。が、その編纂の目的は何の點にあるか、主人が倉卒に見た故でもありましやうが、よく分解りません。緖言などの主意で見ると西洋樂曲は完全なもの故その完全な處を見せるため日本從來の俗曲をばホンの例證までに揭げたといふやうに見えます。そんなら主眼は西洋樂曲の性質を知らしめるといふ處にあるのでしやう。ならば非難の件があります。此れは即ち外でも無く、西洋樂曲の說明の仕方が簡畧に過ぎて居る事です、否、むしろ疎漏に傾いて居る事です。この書よあるやうな曖昧な說明の仕方で初心の者に十分の會得が出來ましやうか、その邊は疑はしいことです。殊に音樂で先第一に十分精細の說明を要すべきものは「マジョル、スケール」「マイノル、スケール」及び「クロマチック、スケール」な

どです。その邊がたしかには書いてありません。其他俗語で書いてあるだけは餘程通じ易さの點に於て益がありますが猶數學を說明すと全じな樂譜の說明としては正しくない語法になッて居る處も有るやうに見受けられました。

例の譜の方には評が有りません。けれどその說明中にも疎漏な處が頗るあります。一寸例せば第十五丁宮さまの歌の說明のやうな「調號なきものは……なれども此の調は（ハ）調なり」とあッて何故「（ハ）調」だか其故が書いてありません。

○近時の女學論

一、男女關係論。

島地默雷氏は、東洋哲學會叢書第三號に於て、男女關係論を述ぶ、大意に云く、

佛家の女人結界の制あるが如きは僧侶梵行修勵の妨げを防ぐが爲めなり猶ほ今日學舍兵營に婦人の出入を禁ずると一般あり奚ぞ婦人を輕侮するの意ならんや且夫印度の俗たる母を重んずること父に過ぐ其子女に名くるも多く母家の性に取れり觀無量壽經に耆婆闍王の母を害せんとするを諫るの詞を以ても知りぬべし世俗猶然り况や佛教に於てをや其婦人を以て佛道非器の貶を爲すものは其志氣軟弱にして難行に堪へず軀躰の柔婉なるに伴ふて勇猛專修に乏しきを貶せしのみ若し志氣勇猛修行に堪るあれば婦人と雖ども之を貶せず却て稱褒して大丈夫と云へり猶ほ法華の龍女即身成佛を說くが如き者是也故に維摩經には舍利弗と天女との問答有て天女は却て男と爲り舍利弗は却て女となりしと說きし者是れ形躰の變化には非ずして大乘小乘機根の優劣を抑揚せんが爲め殊に男女の名を假り來て之を襃貶せり

御說の如くなれば實に安心あり、然し如何に致せ、實際婦人を以て佛道非器と貶して、佛道に得たるを大覺菩薩とあがむるとならば、是れ卽ち現に女人を貶するものにはあらざるか甚はだ心配せらる。末段に云く、

男女剛柔德を異にすれば內外表裡自から分職有て女子教育の主とする所ろは家政監督兒子教育裁縫割烹對賓接客等すべて室家必要の事務に通達せしめ其の夫壻をして朝野の外事に奔走周旋せしむるも毫も內顧の憂なく修齊整頓を全うすると是れ婦人第一の要務にして餘力以て一切萬事に通及するは敢て遮せざる所ろ也之を要するに婦人の德たる嬋娟窈窕柔婉貞從を以て尙ぶときは其性德の艶美を失なはず以て琴瑟調和室家諧樂の康福を保持すべし故に余は兩洋の

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

長短を斟酌し其中庸を折衷するの説に左袒するもの也此の一節の如きは、殆んど完全無欠、吾人が尤も賛成を表する所ろ也、佛教が古來女性に對してつらかりし事は今更ら申すの要なし、現に今ま佛者にして斯く信切に女論を唱ふるものあるに至ては、只だ之を祝するの外なき也。

叢話

○赤子の啼くこと　船越鼎太郎述

問。赤子の啼くことに付き何か心得置くべきこと之れあり候や。

答。赤子は寒、熱、痒、痛の如き其身に安ずべからざることあるも饑渇に迫りて其救助を求むる時も啼くの外には言顯はすべき言辭とては之れなく此啼くことは人類の遠祖より傳はり最も古き言語にして五大洲に通する萬國語とも申すへきものに候へは之れを充分に御験究なされ其啼方を聽き分けて其意味のある所を御了解なさるゝは母親方に最も緊要のことゝ存候之等のことに御注意之れなくては最愛の玉兒か頻りに泣きて熱心に何にか請求むる所あるも母親の之れを辨へさるより其れに應すへき樣もなく其啼く毎に何時も乳を飲ましめんとせらるゝ母親方を常に見受ることに候母親の乳房を赤子の口内に入るゝ時頻りに頸を振りて吸はざるは其乳を好まさる證據なるに乳房を吸はざれは口内に乳汁を強て絞り込み赤子を苦しめ遂には前回に申上候如き諸病を引起すこと抔も之れあり候又啼方の常とは異り注意深き母親なれは病の爲めに啼くと云ふことを知るのみならず何れの所に病ありと云ふことを了解すへきに之等のことは不注意に打過ぎ病の余程重くなり醫師に問はれて始めて心附かるゝ方も之れあり候醫師が赤子の容躰を母親に尋ね候節教育なき人にても注意深き老練の婦人は火の附いた樣に泣き入りたりとか面に皺を寄せたりとか其時に斯く取扱ひたるに如何になりたりとか云ふて如何にも醫師の眼に見へ耳に聽く如く告ぐるものあり之れ醫師の診斷を正確にし治療をも誤らざらしむるものにして眞に玉兒の幸福と申すへし斯く母親の注意綿密なるは一ト重の新衣編物の涎掛には遙に勝りたる慈愛の賜に之れあるへく候。

問。其啼き工合のことに付き承り置き度く候。

答。啼き工合は聲にても眞似の出來難きものなれは況て拙き筆にては御了解も六ケ敷きことゝ存し候へ共左に申上候事を御心得の上御験究せられなは必ず大に御悟りに相成ることゝ之れあるへくと存候。

小兒の意に逆ひ怒りを發したる時は烈く號き睡眠を催したる時は睡けき一種の啼き方をなし欠伸の後に啼き或は啼きながら欠伸をなすヿあり悲き時には歔欷をなし睡り居るものを醒覺す時は鋭聲にて泣き出たすものに候饑渴の爲めに啼くは甚た鑑別し易くして此時は涙を流すヿなく愁なる聲にて啼き又疼痛ある爲めに啼く時は老練なる人には其疼痛ある場所までも知れるものにて齒痛の時には大にむじれて啼き耳に疼痛ある時は短く鋭く耳を貫く如き泣聲を放ち時々手を擧て患側の頭に置くものに候狐痛の爲めに啼く時も亦明白にして其啼き工合は耳に痛ありて啼く時の如く鋭き啼方にては之れなく間斷ありて且ついきむ樣なる泣聲を發し此際下支を腹壁の方に屈曲るものに候氣管支加答兒の時は苛薄して痰の懸り居るが如き泣聲を發し肺に炊衝ある時は泣くと云ふよりは呻吟と申方適當に之れあるへく格魯布即ち馬脾風の時は粗厲聲にて泣き咳嗽も吠ふるか如く響なく腦膜炎即ち驚風の時は耳を穿つか如き號吠をなし其聲哀にして聽くも愁しきものに候劇き煩惱より恢復したる時はむじれて氣六ケ敷く眼に一杯の涕を浮へて泣き又重病の赤子にして其泣く時に涙を流すは吉徵と申すへく之れに反して嘗て泣きたる毎に涙を流したるもの之れを滴らざる樣になりたる時は凶徵と察せらるへきことに候

今育兒法中最も緊要なる箇條を左に略言して此一篇よ附錄し度存候

赤子の健康なるを望まれなば成るへく藥劑を用ひられ間敷候効能著き藥と云ひながら「平素に之を用ひて効あり」と云ふは人の生命の貴重なるを忘れて私利に走るものゝ言語に候又妄に下劑を用ふるは宜しからず一回下劑を與ふれは縱令之れに由て便通を得るも再ひ便秘を來たし再三再四之れを用ひさるを得ざるに至る之れ大に害あるヿに候又胃、腸の病は赤子に最も多きものなれは其食物に注意せらるゝヿ肝要のヿに候通信講義錄中に申述たる藥劑は皆劇き藥には之なきも之等とても用ふる機會なからんヿを望む之を用ふるの機會なからしめんか爲めには平素病の原因となるへきものを心得置き豫防攝生の法を行なはるこそ大切に存候　出生以來赤子を適宜に取扱ひ新鮮の空氣を多量に呼吸して肺臟を健康ならしめ、適宜運動を怠らず行ふて筋骨を强剛ならしめ、安眠を得せしめて充分に腦髓と身體とを休息せしめ、行水をなして皮膚を淸潔强健ならしめ、生後八九ケ月頃までは母乳のみに限り胃に患害を及ぼすヿなくんは藥劑を用ふるヿ稀なるへし藥劑を用

ふるとなくんは其子は彌健康と相成るべき筈に候。

○西洋の御幣かつぎ。

美妙齋主人口述
おぼろづき筆記

何處でも妄信といふ事は有つたことで現にこの今日の日本でもやれ耳が痒いから喜事を聞くだらうの、やれ朝蜘蛛が出たから物を貰ふだらうの、やれどうだから角だらうのとそれはそれは其種類を書立てれば一冊の書物としても猶盡きますまい。　元より其中には幾分か道理の無いことばかりも有りませんが、しかし大抵心理でも言ふ迷ひといふもので西洋各國にもこの類の事は中々澤山ありました。　いや、有ましたどころか、今でもあの豪傑のビスマークが金曜日を凶日と妄信し、また英國などでも人に因つては猶十三人の會食を忌嫌つて居ますから仕方の無い物です。　今是から西洋にある妄信を少しばかり拾上げて御慰にいたしましやう。

其中でも黒痣には一番妙な言傳へがあります。　胸にあれば心が殘酷だといひ、唇にあれば大食家だといひ、耳にあれば富貴の相だといひ、膝にあれば財産のある妻を得るといひ、咽喉にあれば金持だといひ、胸の右にあれば貧困だといひ、左の足にあれば亂暴だといひ、右の足にあれば怜悧いと云ひ、肱の邊に澤山あれば繁昌で終ると云ひ、鼻にあれば旅かせぎに爲ると云ひ、額の右にあれば人の上となると云ひ、左にあれば零落するといひ、また婦人の下腮にあれば悲歎の兆といひます。

其外朝階子段から落ちるとかならず凶事が來るといひ、ナイフとフヲークとを打違へて置とまた惡事が舞込むといひ、また自分の愛する人にナイフや鋏やペンナイフを贈るとかならず愛情の糸が切れて仕舞ふと云ひ、もし此時餘儀なく受けなければならぬ場合ならば貰つた返禮に留針一本でも銀貨一つでも先方へ與へます。　これは買つたといふ趣にこじつけて仕舞ふのです。

○一唱百歎

安倍宗任
我國の梅の花とは見つれども大宮人は何といふらん

太田道灌
斯る時さこそ命の惜からめかねてなき身と思棄ずば

上杉謙信
武士の鎧の袖をかたしきてまくらに近き初鴈のこえ

小説

○哲女の巻　第二章、藤裏葉。(上)　月の舍しのぶ

年少學士ハ彼方に向ひ、
四條さん、私は卿にお目に懸つたは僅かに一ケ月前からの事で、お話ししたヿは今日で僅かに八回に過ぎません、が若し啻に年月の長きを以て申せば、陰乍ら慕つて居りましたるは既に私が獨逸に參る前からの事です、若し交情を以て申すヿを得ば、卿が今ま私をお信じ下さる樣に、私は卿を深く信じ、凡そ肉を持てる人間に出來得ると云れば、其出來得る丈けの交際は既にお互ひに持つて居ると考へます、故に卿は、私が今ま申す事を、年月と尋常の關係から斷ち離つて、親友の眞實なるハート(心情)を以て聞て下さるでせう歟。
窓傍の椅子に腰打掛て、風采の凜然たる一女學生は、切りに此方を凝視て、謹聽したるが、歟と云へる最後の彈丸に悚として身を正し、莞爾として微かに打笑みつゝ、
大層改まりましたお問ですが、妾は既に卿の親友でありまする、卿も亦た既に親友として妾を見て下さると云へば、卿が仰しやるヿも亦其外には出ますまい、眞實なる友人として承はるヿが出來る丈けは、能く承わる心得で御座います、何事ですか。
學士は、決斷したる口元をビクともせず、光を增したる兩の眼こを以て、眞實に女學生の優たる目を射通し乍ら、今日限り親友たるヿを絶つて、更らに一層の交りを與へられんヿを願ひますので、即はち一生の妻として、卿の手を與へられん……。
エーッ。
固より卿には、意外の申出しでせう、又或は卿の意見に根底から反對して居るでせう、又斯る近頃の新友人が、斯る場合に於ての申出しは、或は卿のお許しなさらん所でせう、然し私は悉く之を無頓着に置て、卿が今まお答へを爲すつて下さるヿを切に望むの理由を、持つて居ります。
理由…理由と仰しやいますか、何う云ふ理由が有りますか存じませんが、私は卿を友人として見より外に少かの考へも御座いません、私は此頃初めて友人と云ふものゝ交わりを知ましたので、不十分ながら此交に必要の眞實は段々に養なひたいと思つて居ります、ですが此より一層上の交わ

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

りとは何のようなもので御座いませうか、少しも存じません、亦其交はりに入りたいとの望は只今些かも御座いません、其樣なるお話しは切角……切角伸びかゝつた私供が交情の芽を摘まむやうなものでせうから、何卒仰しやらずに置いて下さい。

學士は頓かに涙を曇らせて眼光を包み、測る可らざる遺憾の激情を僅かに、震るう所ろの口元より洩らして、

然しモー一言言はせて下さい、私は只だ卿が一生同伴の友人と爲りたいと申しますのです卿が生物學の研究は私も出來る丈け助けませう、卿が女流の爲めにお盡しなさるとは、私も出來る丈け助けませう、卿の志を一つでも曲げて下さいとは申しません、又卿の品格を一つでも落して下さいと申しません、只玆に私がホールハート（全心）を擧て卿よ呈する代りに、卿の神聖なるラブ（愛情）を私に與へて下さいと申すので、イヱ今與へて下さらずとも、只之を與へると言つて下さるとを望む計りです、此ラブ（愛情）を外に與へ爲さる共、眞理への愛は減じますまい、お志ざしは屈しもしますまい、生物…眞理…女權伸張…女子獨立…女子獨立ゟ全く離れたる只一の卿のハートを戴たいと申しますのです。

四條哲、たゞ打伏してよゝと泣く。學士は全力を凝めて倘ほ辭ばを強くし、然し乍ら倘一層に靜かにして、

四條さん、此の一人の學生は、今失望と落膽とを以て、全く世を觀ずるものとなりませうか、又は玆に高尙ある愛情に溫められて、更らに熱心ある研究家と爲りませう乎、私しを世より退くるも進むるも、皆な卿のお答へ次第に在ります、四條さん、

漸く顔を擧げて、恨めし氣に學士を見る、其目今まは涙を拂つて、少しく怒りの摸樣ありしが、學士が斷然として身を正しつゝも、兩眼に落ちんとする玉露を掛けて口を嚙ひ切り、返答如何んと息氣を凝らすの樣姿を見て、其目復もや涙を湧き出し朦朧として彼方を見ざれば、漸やく亦た顔を垂れ、

郞は、私と只だ友人として居つて下さるとは出來ませんのですか、

意外の返答に勇氣も失せ、思はず口籠りて、

固より出來んとは御座いません。

双方暫らく沈默して言葉なし、哲は漸やく沈默を破り、

郞の友人としては多少眞實ある友人と爲れませう、郞の妻としては尤も不眞實なる者で御座いませう、若も是非とも

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

に人の妻に爲れと云ふ定めが有りましたらば、私は必らず郎の許しを願ひませうが、今の此の心を以て郎の一生に結付くるは、友人として考へても、私の眞實が私しに許しません、若し妻と爲らず、只だ友人として居りましても、郎の愛が得られまするならば、何卒此儘にして置て下さい、夫に又た、たとひ仰るようにお答へ申すとしても、叔父の留守中に定めるとの出來ないのは、御存知でせう。

○さすがに双紙　第五篇(上)　美妙齋主人

栗殼が出て行つて後程なく時子は只一人で歸ッて來て部屋へ入ると其處には召使の下女阿三が居ました。

「おや御娘さま、どちらへ？　只今旦那さまが御尋ねなさッてゐらッしやいました」。

「左樣かえ」、胸を撫下してにッこり笑ひ「何ね、そら花房さんが駒が嶽へ行けと御誘へなされたけれども、ね、きまりがわるかッたから妾は途中から一人で逃げて歸ッて來たの」。

「そして花房さんは？」

「妾は妾が歸らうと言ッたら花房さんも一途に御歸りなさるだらうと思ッたが、左樣でなくて花房さんは一人でさッさと行ッておしまひなさッてさ。本當に妙な人だわ」。

言ふ顏を阿三はじろりと見ます。

「けれど阿娘さまえ」。

「なに？」

「ホ‥‥阿娘さま‥‥栗殼さんといふ方は‥‥あの方も妙な方ですねェ」。

「あゝ、栗殼さんは何うもねェ」、言ッたばかりそれでも心注いて阿三の耳に口を寄せ、「栗殼さんは御部屋に居らッしやるのかえ」。

問ハれて阿三は栗殼の部屋へ行ッて樣子を探ると、駒が嶽へ出て行ッたとの事ですから、その趣を時子にも語りました。

「駒が嶽へ‥‥御一人でか知らむ」。

「あの、下婢に聞きましたら何でも花房さんの御後をついて御出でなさッた樣子で大層急いで居らッしやッたさうでムいます」。

「左樣かねェ」、一寸眉を顰めて直に伸べ、「あたしは、そンあら、途中から歸ッて來て‥‥本當によかッた」。

下女の阿三は實に左樣ですと言ハぬばかりの顏をして居るばかり。雲刻は言語も絶て居ましたが、之とても若い者主從二人の差向にはやもう遠慮する處も無く、やがて時子の顏

を瞻詰め、

「栗殼さんはあンな可笑な方ですが、それと違つて、ねエ、阿娘さま、」言ッて時子から「え？」といふ故意との疑問を呼起し、「花房さんは本當に御人柄のよい方ですことねエ」。

時子が常から花房をば敬慕して居る事を暗に阿三も知つて居ますのでかうやつて褒めて來ましたが（拜領を釣出す餌か知らん）、しかし心からその人柄の良きをも悦こんでは居ても斯う言はれては流石に言瞞める氣にあります。

「あら三が‥何だねエ‥御人柄といふ處へばかり眼を注めて居るやうではいけないンだわ。まア、しかし、花房さんは栗殼さんに比較して見ると一段教育をも深く受け、一層我身の監督をもよく行ッて居る方らしいのさ」。

「阿娘さまは直六づかしい御言葉を御使ひあそばしますから‥おほゝゝ‥三なんぞには分解らなくなつて參りますよ」。

「左樣だねエ、是はわるかつたよ」。

つゝましい淑女の本質とて、必用も無いのに思はず漢語を用ゐた事が人に學に誇ると見られはせぬかと思ふまゝ紅らめるとは無くさッと顏を赧らめます」。

「しかし、どうも男子といふものは一躰婦人の姿や何かにばかり眼を注けて、ねエ、肝心の才智や氣轉をば二の次にして居るもンだねエ」。

「まア左樣でございましやうねエ」。

「それが一ッは婦人が姿や何かで男子の愛を得ばそれでもう十分なことゝ考へて滿足するのも一ッの原因にあッて居るンだねエ。

そりやア成程自分をよく思ふのは活物の情だけれど‥」

「おほゝゝゝ」。

「まア左樣ぢやあいかね。さうだけれども、まづ言はゞ末の末の色香を愛されてそれで嬉しがると言ふのはあンまり齒痒いことだわ。殊に色香や何かは本々天賦のもので其當人の才不才でどうなるといふものでも無いのに、やれ妾は好い婦人だの、やれ妾は小町より好からうのと自慢するのは心の狹い限りといふもので、まづ誇つていゝ處は自分が家政に熟練して居るとか、育兒に通じて居るとか‥‥それだッて陽して誇つてはまた沙汰の限だけれど‥‥まアその位な物さねエ」。

阿三は何處やら顏の辨護を得たやうですから、切に内心で嬉しがッて居ます。

「ヘイ、全く左樣で‥‥」

「御前なんぞも、ね、だからよく〳〵氣を注けて……得意としていゝ事を得意とする樣に心掛ければ行々御嫁に行ッた上でも……」

「あら、……否でございますよ……御嫁はいゝ。

「そりやァ御前、婦人の思はせぶりと いふものだわ。　どうせ、終尾には御嫁に行くゝ決つてゐるのだもの。

「どうせ、終尾には……くす〳〵」。

「だが、ね、花房さん、ね、……あの人も最初は」、どうしたか聲が一寸低くなり、　「色香を愛する人のやうだッたけれどしかし遂ぞ妾に向ッて、其後」、この「其後」の「其」に深い意味が有ります、　「その後、かりそめにも否らしい言葉なンぞ言ッた事も無く、たゞ志の合ッたといふ處だけを樂しんで居るやうで……ね、あのとほり學問も御有んなすッて世の用もいゝけれども些もそれに誇るやうな躰も無く……」

「そして誰にでも御挨拶の よろしくいらッしやいますこと、ね、栗殼さんなぞとは丸でお月さまと泥龜ですわ。　何故と仰ッて御覽じませ、御娘さま、此

間も妾が御湯から出て參ッて」鏡へむかッて髪毛を梳かして居ますと丁度花房さんが何心なく入ッて御出でなさいましたが、「おや御化粧が出來るね」と仰ッて直に御部屋からの好い香のする水の香水を、ね、阿娘さま」……

「おほゝゝ、わるい香のする火の香水といふのが有るかねエ、おほゝゝゝ。」

「あら、……つひですわ、つひでさアね。　そして御聞きあそばせ「ちッと是でも御付け」と仰ッて瓶を下さいましたの」。

實に骨を貰ッても犬は喜ぶ。下女はまたそれ相應に花房を愛敬して居ます。　かう褒められては贔負する心には我身を褒められるより嬉しくて更に時子は何か言はうとする折から父親が歸ッて來ましたので折角の話の腰も折れて仕舞ッた、處へまた引續いて花房が駒が嶽から歸ッて來た姿を見れば……見れば……まア何でしやう……衣物に血が付いて居て、そして腕は引掻いたやうな疵で埋まッて居ます。

花房一人です、歸ッて來たのは。　そして花房の顏色は凡ではありません。

某紳士窓前に立ち牧者の無情にも羸馬を鞭打ち去るを見て呼で曰く野郎止めよ汝聞かざれば吾汝を鞭打たん牧者謝して曰く貴下吾罪を赦せよ吾未だ貴家に羸馬の親友あるを知らざりしと。

佳傳

○貞實なる未亡人

當今米國ニウヨーク府にて出版するフランクレスリー繪入新聞の持主兼支配人たる、フランクレスリー夫人の如きは、蓋し活潑大膽なる女子の多き米國に於ても、尙ほ多からぬ女として評判せらる。夫人は素と紐育の交際社會に於て、華美綺麗を盡して遊興さるゝ人々の仲間なりしが、天縁全く熟してレスリー氏に嫁し、幾年月の間だは最と樂しく暮らして、世の中の貧苦困難とは抑も如何ようのものにや、エブストルの字引に付て其字義を正さねば相分らぬ程の豐かなる身なりしが、レスリー氏不在の間、一朝非常の出來事ありて、莫大の損亡ありしのみか、殆んど六萬磅即ち凡そ三十萬圓餘の借財を遺して忽焉死去したり。臨終の折りレスリー氏は夫人を枕邊に招き、何卒我が營業を持つゞけて御身自から之を管理し、尙ほ借財を皆濟して死後に余が名譽を回復し玉はれかしと、只だ之をのみ遺恨として果敢なく去りたるにぞ、夫人は大ひに志を立てゝ良人の遺言を果さんとに決心し、從來少かだも經驗なき身にして、而かも介弱き女の一と腕を以て、大膽にも此の大失敗を償はんとは覺悟したり。

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

依て身の廻りの衣服、寶石、化粧具一式を賣拂ひ、府内の或る下宿屋に行て、上層の尤も廉なる一室を借受け、茲に下宿して日々新聞社に出勤し、百の困難、百の不都合、百の貧苦欠乏に打耐えて、近年に至り一切の借財を皆濟し、日々新紙數十万部を印刷して利益莫大なる運びに至らせ、尚ほ外に安息日雜誌を毎日曜日に出版して之れ亦た十三万部の出高あり、更らに又た、獨逸語の繪入新聞を日々出版して之に、十五万部の讀者ありと云へり。」斯れば今日は最早前年にも立優つたる富有の身とは爲りしが、尚ほ下宿屋に假寓して別に家を設けず、毎朝七時に床を離れて、水浴し、ダムベルもて運動し、集り來る通信書を一讀し、扨て朝食して手に袋を下げ、滊車に乘じて新聞社に出勤し、途中車内に於ても尚ほ用事を辨ぜらるゝとありと聞く。」夫人今日の地位を慕ひ、切りに婚姻を申込むものあり、平均一週間に二人以上の相談ありと云へば、世上の評判によれば、夫人は兼て右を謝絶するの文章を印刷し置き、彼の申込ある毎に一々此印刷したる書面を送り返答すと云へり、然るに之を辨ずるものありて云ふ、否な〳〵決して然らず、實際は夫人兼て其文を綴り置き、其都度〳〵只だ之を寫して返書とさるゝありと、然し何れにしても吾人には耳珍らしき談しと云ふべし。

然れども夫人は尚ほ未亡人として住まわるゝなり、故のレスリー氏の寡婦として獨居せらるゝ也、蓋し良人が今端の遺言つよく其胸を打ち、介弱き一身をも奮動して大に決心するに至らしめたり、夫人が此の成功は一に其夫を愛するの愛に基づくと云ふべき哉。

思ふ美人と話の出來る法

或若者が得意顔に「僕が今度新に發明したのは僕や君と未だ近付でない美人と話を容易に爲し得るとで蒸氣機械や電信の發明だつて叶ふもんか、今言つて聞かせう

未だ知らぬ美人と話しするには、其美人の家の窓下で俄に「火事だ〳〵」と怒鳴るのサすると美人は必定顔を出して子、ソラそこに僕なら僕が居るから「モシ火事はどこで御座います」と聞くに違ひない、サアそこだて、ソコデ詩人ぶつて胸を叩いて其美人に見せ「イヤ火事はこゝで御座います、此火はあなたの情けの露の唇でなくては決して靜まりはしませんと云ふノダ(團々珍聞)

寄書

○新日本の詩人の論をよむ

柳園主人

民友記者は國民の友廿八號に新日本の詩人と題し例の雄壯なる筆を以て詩人の功能及從來我國に眞正の詩人の出ざりし事を論ぜられたり。其論の内和歌に關して一二の不穩なる所ありかゝげて以て大方の敎を乞ふ民友記者云、

翻つて我邦を觀れば開國以來殆三千年未一個の詩人有るを見ず(中略)眞正の詩人即高尙なる意味に於ての詩人彼「ヴオルヅヴオルス」が明言したる如く眞理に就て高大に就て美妙に就て愛と望みとに就て及信仰に依て調和されたる悲愴なる恐懼に就て苦しめる時に惠まれたる慰藉に就て道德の浩氣に就て智巷の勢力に就て廣く天下庶民の間に溢れたる祝詈に就て歌ふ所の歌人は未之有るを見ず

余は思ふ高尙なる意味に於ての詩人をのみ眞正の詩人と云には非ず我國の文學未進步せざりし上代に高雅なる思想を備へ想像に富みて美妙の言語を用ひ美妙の趣を云あらはしたる多くの歌人あり是らの歌人ハ眞理に就て信仰に依て調和されたた

る悲愴なる恐懼に就て智慧の勢力に就て歌ふ所ハ欠乏したりと雖もヿハ歌人の責にハ非ずして其時代に文學の進歩せざりし故と云べし而してヿれらの歌人のよみし歌を見るに人の心を慰さめ又ハはげまし又ハ喜ばしめ種〻の感情を起さしむるの歌多し豈開國以來眞正の詩人なしと斷言するを得んや乞ふ餘暇あらハ萬葉集又ハ延喜以後の勅撰集及家集を一讀せられよ余か言の信なるをさとらるなるべしと記者又云、

且和歌の如きハ日本流義の發明とも云べき者なれ共其本に立歸りて見れハ矢張支那の詩より脫躰換骨し來りたる者なれば隨つて又其格調聲律に拘はるの疾も傳染し且如何に雄大高尙の思想を歌ハんとするも僅〻たる三十一假文字の內に含蓄せさるを得さる爲に恰も大平洋の水を盃石に盛るに異ならず。

此文中第一に不思議なるハ支那の詩より脫躰換骨したる者なればといへる事なり我國の上古支那より輸入したる文明ハ多く思想上にのみ關して我文法語格等を變ずる能ハざりしハ史家の云ふ所なり和歌の如きも思想上にて多少支那の詩の影響を受し事ハあるべけれど脫躰換骨したりなど〻云事ハ全なしもしさる例證あらば明示せられん事を望む次に雄大高壯の思想を歌ハんとするも云〻といハれたるハ未た歌の事ハ詳に知り玉ハねハ御尤なる儀と云べし歌に多くの種類ありて長歌あり今樣あり旋頭歌あり豈三十一言に限らんや十分に雄大高尙の思想を述ふるを得べし次に云、

故に其極〻秀逸なる物が僅に花に鳴鶯水に住蛙の歌へる類にして未以て目に見ヘぬ鬼神をも驚かし猛き武士の心をも柔らくと云が如き者あるを見ず云〻。

此所ハ前に歌を批難せし文章の勢よりいハれしものなるべければ大人氣なく論ずるに足らざれど記者が未古代の和歌の深奧なる堂に上らずして外面より評するを惜むのみ次に歌の快活なるを賞して又云、

和歌の美ハ誠に美なれとも其美甚少に甚薄く甚輕し未之を以て宇宙の美を示現するに足らず。

是ハ和歌の宇宙の美を示現するに足らざるに非ず又從來の歌人に示現せしむるの力なかりしにも非ず全く上代文學の進歩せずして歌によりて宇宙の美を示現する等の思想なかりし故也されば歌と雖も詠出す人の手際次第にて宇宙の美を示現し又宇宙の秘密をも容易に說明するを得へし次に現今の詩人の事を論して云、

新躰詩家とか云一種の詩人出來りたり吾人ハ其作を一讀するに未其有難味を發見する能ハず(下畧)。

此事ハ余も同感なりし近來の新躰詩又ハ唱歌又ハ何の曲などいへる新作の歌を見るに(余の眼力の及ばざるかハ知らねども)……是ぞ新日本の詩人の作と感服するハ少なしかして其の中にハ趣向の陳腐なる思想の高雅ならざる想像の淺薄なる美妙の風情なき句調の面白からざる文法又ハ修辭上の誤ある等も少なからず之を萬葉集又ハ延喜以後の長歌源平の比の今樣建武以後の童謠等に比較して見るに別に新躰とおほゆる所なくしてかへりて高雅なる思想などハ文學の進歩せる新日本の詩人にハ之を見出す能ハず文學の幼稚なりし舊日本の歌人中に多きを覺ゆ。

次に我國に詩の思想の欠乏せる事を論して其斷案に云、

故に知るへし我國にて古より詩人を生ぜざりし所以而して現今に於ても生ぜざる所以敢て理由なきに非ず即彼詩人なるものにして宗敎の觀念道義の觀念眞理の觀念眞理と善德と美妙とを一貫したる高尙なる觀念なきか爲なる事をかく論ぜられたれど詩の思想ハ敢て高尙なる觀念に限るへからず「マコレー」の「ミルトン論」に云。

(上畧)詩家の業ハ景情を寫し出すにあり詩家ハ「シヤフテスブリー」の如く道德性の主義を信ずるを得べく「ヘルブシアス」の如く人皆私利の爲に働くといふ說に依るを得べく又更にかくの如き事を考へざるも可なり詩家の此等の問題に關せる信仰の如何ハ正當に所謂詩なる者を影響せさると猶畫工の淚囊又ハ血液の循環に關せる意見の其畵ける「ニオベ」の淚又は「オーロラ」の紅顏を影響するなきとひとしかるべし(下畧)。

故にたゞに高尙なる觀念なかりし故に從來我國に詩人を生ぜざりしと斷定する能ハざるべし然れとも余ハ又高尙なる觀念の詩に不必用なりと云には非ず高尙なる觀念ハ詩の思想の上乘なりといへどもあまりに高尙に過ぎて記者のいへる活ける生命の水たる事則人をたのしましむるの功能を失ハん事を恐る〻もの也「エウエロン」氏の「エステチク」(美學)中にさる事を論じたる大意に云詩の趣向ハいかに面白くとも思想高尙にして言語難きに過ぐれハ人〻其妙想をさとるに至らずして中途にてやむに至るたとへば其絕頂に至れば非常に景色眺望のよき山ありとも其坂路のけハしきに過れハ其美景を賞せんとする人も中途にて歸り又ハからうじて頂上に至りたりとも其時ハ既に心神勞れて其美景を賞する事能ハざるが如しと。されどよしや高尙に過ぐとも民友記者のいへる如く我文學世界に於て衆人岸上に躊躇せる時に當り詩の大海に舟を乘り入る〻の「コロンブス」あらん事を切望するものなり。

新報

（此欄內自由に轉載を許す）

○婦女子に關する雜誌

明治十七年六月、吾黨が初めて女學新誌を發行したるより此方、女學論の流行と共に、次第〱に女の雜誌世に現ハれ來りて、又知らぬ間に跡方なくなりたるも多し、故に其の過去帳に入つたるは最早言ハず、現に存在するものゝ付て婦女子に關する定時刊行物を集むれば、左の如しと申す。

女學雜誌	東京日吉町八番地	女學雜誌社
いらつめ	東京駿河臺南甲賀町八番地	成美社
日本之女學	東京本石町三丁目十六番地	博文館

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY

貴女之友　東京本町二丁目三番地　東京教育社
婦人教會雜誌　東京橘町一丁目十一番地　婦人教會
東京婦人矯風雜誌　東京神田紺屋町十一番地　福原祐四郎
女新聞　東京北稻荷町四十三番地　女新聞社
婦人教育雜誌　上野前橋南輪町　上毛婦人教育會本部
大日本婦人衛生會雜誌　東京日吉町八番地　婦人衛生會

〇淸潔の空氣

社會より姦淫の空氣を取拂はんとには、先づ藝娼妓其他不潔物に關するの文辭を公けの紙面より退去するにあり、吾人は近頃の新聞紙上に於て其の辭ぱの漸々に淸潔に趣くを見て感謝の念に堪へざりき。然るに圖らざりき近日府下の諸新聞紙に萬遍なく投書せられたる、大槻修二君愛衣錦の第二回に於て、函舘區遊廓に於ける君が遊興を記して、而も大に名譽とせらるゝの趣あるを見る、實に奇怪の極に非ずや。吾人嘗て府下近邊の遊廓を觀察して、各樓の看板に名家が揮毫せられ而も尙ほあり〳〵と其の雅號を明記して誇り示さるゝを見て喫驚したり。嗚呼文人道德につゝしむに至らずんば、淸潔の空氣何の日にか澄まん哉。

〇慈惠院看護婦敎育所　同敎育所にては今度十二名の生徒を募集せられ入學試驗は多分十月上旬に執行せらるべしと而して試驗合格者は見習ひとして採用し再試驗の上看護婦生徒とし每月金七圓の豫約を以て修業せしめ卒業の後方法を設け辨償可致規則の由なり。

〇東洋英和學校　麻布鳥居坂の東洋英和女學校は現今生徒の數二百五十名に達し尙ほ續々入學者あるに付き此度校舍を取廣げ入校を許すと云ふ。

〇高等師範學校　同校女子部にては以來成るべく各府縣官立女學校の卒業生を撰拔して入校せしむる事にすると云ふ。

〇女子職業學校　同校には種々職業ある由なれども尤も進歩せしは造花及圖畫にして就中造花の如き毫も外國品に劣らずと云ふ又た同校には暑中と雖も休業なく既に去る十一日には定期試驗を執行したり。

〇靜女塾　神田錦町の同塾は多年女子敎育に從事したる平尾光子女史の家塾にて十年以前より懇切に敎授し來られしが今度更に校舍を駿河臺鈴木町二十番地ヘ移し本月二十日より授業を始めらるゝと云ふ。

〇幼稚園保姆講習所　東京敎育會にては幼稚園保姆を養成せんが爲めに速成を主とし每月金三拾圓以内の費用にて題名の如き講習所を設立する事に議決し渡邊孝吉君會長に木寺安敦氏常議員に日下部三之助稻田政吉金子治喜小澤政胤帖佐雄介の五氏を商議員に撰擧し來九月より開講すると云ふ。

〇美術品保存館　來る二十三年に開設する第三回內國博覽會場に設くる美術品陳例館は堅牢なるものを建築し同會閉塲後も美術品保存舘に充てんとの計畫ある由にて其筋にては目下京坂地方巡回中なる文部省傭フエノロサ氏の歸京を待つて設計等の取調をなさしむる筈なりと。

〇沖繩縣の風俗　片田舍には文明の今日に至りても隨分珍らしき風俗もあるとなるが聞く所に據れば沖繩縣にては斷髮者には一切妻を與ふるものなしと云ふ。

〇電琴　伊豫國喜多郡內子村の曾根愿三郞氏の發明されたる電琴は竪四尺橫三尺許の筐中にピヤノの如きものを裝置し其筐の前面には紙腔琴を備へ電氣の作用に隨ひ琴音笛聲を合奏せしむる樂器なりと云ふ。

〇娼妓公許　前號の紙上に靑森岐阜兩縣にて娼妓公許を出願せし旨掲載せしが又々埼玉縣にても娼妓の公許を出願せんとするものあり北海道廳にては既に千島國擇捉島へ貸座敷の設立を許可したりとの忌はしき報に接せり。

〇岐阜婦人協會　岐阜地方の有志者は此度婦人協會を設立し專ら小學以上女子就學の道を謀らるゝ由。

〇愛和女學會　今度豐前國行事驛に愛和學會なるもの設立し本月三日開會式を執行し十四年以上十八年以下の女子をして裁縫手藝英學數學漢學作文習學唱歌修身等を學ばしむると云ふ。

〇松本婦人矯風會　同會にては去る十四日夜エルマー隆旗兩氏を聘し縁座に於て演說會を開き聽衆七百余名も之あり頗る盛會なりしと云ふ。

〇京都光風社　華族芝山益子君始上田重子三輪貞信諸子其他同志協合して設立せるものにして每月婦女子のみの歌會を催する由にて其の目的は歌道を研究する爲め同志相集りて歌會を開き互に兼題當座の歌を評論し兼て初學の婦女を誘導するにありと云ふ。

〇女の雜誌　以后本社に受取りたる女の雜誌類は其落手月日を記す。

貴女之友第卅二號(八月十九日)〇婦人敎育雜誌第四號(八月廿一日)。

外報

(仝前)

〇女帝の數　現今世界に幾多の女帝ありやといふにゴーロア新聞の取調ふる所に依れは日本に一人(皇后)獨逸國に三人(老帝先帝新帝の皇后)露西亞に一人英國に二人(ヴヰクトリヤ並に奈翁三世の皇后ユーゼニー)墺太利に一人ブラジルに一人白耳義國に一人支那ヨ一人にして總躰十一人ありといふ何故に我皇太皇后を此算外に置きたるにや疑はしと去る十七日の朝野新聞に見えたり。

〇警察婦人　ポリスマトロンと云へる警察婦人を置き警察署に拘留せらるゝ女子を保護監督せしむるの議は前年來米國於て甚だ騷々しきとなりしが今度ワシントン府內に於て年給六百弗を給する同婦人三人を置くの議すでに下院を通過し此頃上院に廻わりたりと云ふ。

因に云ふ此の警察婦人の條例を最初に發布したるはマッサチウセッツにて去年四月廿七日の事なり。

〇ウイルラルド孃　米國シカゴヨ在る諸の婦人會は今度合同して婦人協會の同盟(ウーマンス、レギウ、ヲフ、シカゴ)なるものを造り彼のフランセス、ウイルラルド孃を會長に擧たりと云ふ。

〇米國共和黨の告文　當年米の合衆國に於て大統領を改撰するに付き諸の黨派よりそれ〴〵に告文を發し同盟賛成の人を引入るゝことなるが茲に共和黨（レパブリカン）より發したる告文の中に、

吾黨は確認す凡そ正當の權理を有する府民は其の貧富に拘らす其の産地の何處なるゝ拘はらず人種の黒白なるに拘はらず總へて公開撰擧場に投票し且つ其の投票の正當に數へらるべきの權理を有することを確認す。

とあるを見てサンフランシスコのノックスグードリッチ、及エルレン、サーゼントの兩婦人よりシカゴの中央會議々長に宛て〻電報にて問合はせたるに、告文中正當の權理を有する府民とある中にはアメリカの婦女子をも含み居候や電答を乞ふ。

之に對するの答左の如くなりしと申す、

此告文の意義は左樣に解釋せらるべきものと信ぜず。

We hear that the Emperor of Japan has created a New order, the Order of the Crown. It is exclusively for Women, and is to be the reward of distinguished Merit. (The Lady, London)

小供談

〇母の愛

今は刈入れ時にして農夫は皆一家を擧げ刈入場にあり刈入に餘念なくありましたがフト小供の泣く聲が聞こえます其聲は一番早く母親の耳に入りましたから頭を回はして見まするに大な鷲が何やら攫みて飛で行きました通例の人には何だか明かに見へませなんだが母の目は恐しひもので慥か其の子であると云ふ事を知りました處で母は狂氣となりまして只一目に其子を見つめまして一散に逐ふて行きます何かありても馬か居りても無二無三に行くものですから後より數人の荒男は追ひ懸けましたけれど中々逐ひ付きませぬ彼是する中に鷲は山深く飛び込みました其山と申すがこれまで人の行た事のない險山でありますからアノ山へ這入つたら迚も及ハぬ殘念な事であると皆里の人は云ふて居りますうち彼の母親は何の恐れもなく空を飛ふ如く其山に入りました其勢は全く人間ではあるまいと人は皆噂して居る程でありました時に鷲は或る巖の上へ止りまして暫く息ひましたが鷲は玆處へ置くなれば安全と思ひましたのか但しは母親の愛か其子を引き付けましたのか其子を其所へ置きまして又里方へ飛ひ行きました次で母親は其巖の上に上りまして其子を抱き上げましたに幸にも別に深き傷も御座りませなんだから非常に喜びまして接吻したり眺めたり暫くして居りましたがイザこれより歸らんと里の方を見下しますと雲は遙かの麓で繞き險しき巖危き谷何所となく身の毛立はかりでありました何如してマーあの山を越へたるかとの子を連れてその谷は下れぬもし狼にも逢もせば此子を如何せんサットテ此所に留まらば日も暮れ再ひ鷲も歸り來ん如何せばよからんアヽ恐や此山と獨り巖の上に足踏して居りましたに谷の底からオーと云ふ聲の致しましたイヤ獅子か吼ると云ふ斗り其儘其所へ氣絶致しました

（未完）

婦人言論の自由

婦人矯風會書記佐々城豊女譯

一冊十錢 郵税四錢 （新版）

德富猪一郎君評曰く婦人の言論ハ人を屈服するに非ずして人を勸誘するに在り而して其勸誘するや或ハ涙となり或は笑と爲る然れ共其一泣一笑時に或は千言萬語滔々たる議論に優れると無きにあらず吾人は佐々城姉が此譯の世に出でたるを喜び世の姉妹に此書を一讀せられんとを推薦す云々

巖本善治君評曰く然れども余が此書に於て特に尤も歎賞して措く能ハざる者は本書之著作の由來記にある也記に云く月明の夜妾良人と共に出でゝ逍遥す偶ま會堂に入て共に座に就く時牧師會后の集會に云々此時妾良人の面を窺ふに良人勃然として立ち反論して之を不可とす妾實に晴天霹靂の思ひありき然れども直ちに携ふる所ろの速記用紙筆を取出して則ち良人の論を筆記して成る所のもの即ち此書なり云々

諸姉妹乞ふ一讀を賜へ。

東京日吉町八番地

女學雜誌社

每月壹回廿五日發

初學の栞（しよがくのしをり）

密畫肖像入 壹冊三錢拾冊廿八錢 遞税壹錢宛總テ前金

右は小學兒童に智慧と品行とを修めんとて最も有益なる傳記小說作文理科等凡て敎育上の事項を平易に解せり故に兒童は勿論父兄方の庭の敎へに必要の良誌也

第二號既發 東京芝櫻川町八番地 萬春堂

女子必携

今世ひめ鑑

全一冊 定價六十錢 郵税十四錢

關輪正路纂著○木村熊二、田口卯吉兩君序

右出版いたし候是非は自から公評あらん凡そ當世婦女子の心得べき承知すべき質問すべき箇條は大抵悉とく記載し有之候蓋し昔の「ひめ鑑」の重寶なりしとを御存知の方々は此開化したる當世のひめ鑑を亦同樣に助けあるとを想像し玉ふべし

女學雜誌社

明治十二年一月創立

東京經濟雜誌

政治文學及商業上之要報

每土曜日發兌

第四百三十二號

明治二十一年八月十八日發兌

目錄

◎（官令）數件

◎（社說）兌換制ノ基礎成レリ○普通物產主義及特別物產主義○ジャッパン、ヘラルド記者及東京灣○井上伯自治主義ヲ斷行セラルベシ○歷史概論

◎（論說）日本森林論

◎（經濟學者列傳）アダム、スミス氏

本號ニハアダム、スミス氏ノ精巧ナル肖像ヲ挿入セリ以後時々有名ナル經濟學者ノ肖像ヲ挿入スベシ

◎（寄書）三池鑛山ノ拂下ニ付テ感アリ

◎（雜錄）數十件

◎（金融及商業ノ景況）數件

定價

一冊七錢○十冊前金六十五錢○半年分前金一圓五十六錢○一ヶ年分前金二圓八十六錢●府外一冊ニ付郵税一錢宛增

東京々橋區彌左衛門町七番地

經濟雜誌社

Digitized by Google Original from CORNELL UNIVERSITY

女學雜誌社出版書目

○鈴木弘恭大人著述○小中村淸矩大人評

改正増補 文法口授 全一冊 ●一名和文獨案内

定價十八錢 郵税四錢

此書は文章家なる鈴木大人が多年諸學校の生徒に和作文を授業せられしを筆記したるものにて曩に出版したる所大に諸校の賞用を得たれば尚亦今般大人に乞ひ改正増補して古人の文章數十篇を卷尾に付し或は雅文を俗文に譯し或は漢文を和文に譯したる作例をも擧げたり然れば啻和文のみならず漢文を學ぶ人の和文を漢文に譯するにも大に益あるべし且女學校などに於て和文を學ばんとする生徒諸君の爲めには此に過たる良書なかるべし

●右文法口授は學校敎科用の書籍に適當也とて發兌後一週日を經ざるに既でに成立學舍女子部跡見女學校頌榮女學校並に明治女學校長榮女塾等の敎科書となりたり

船越鼎太郎著

産婦小兒 攝生法

定價十八錢 郵税四錢

巖本善治編

木村鐙子小傳

定價十錢 郵税六錢

○田口卯吉君結髪沿革附錄○和崎義路君校○巖本善治君跋
○渡邊鼎君著

束髪案内

美製小本八十頁細圖入 定價十五錢郵税四錢也

當今束髪流行の折柄其結び方ハ案内の婦人少からず此書ハ日本婦人に適する束髪二十餘種の結び方を丁寧に敎へ一々細圖を附して親切に案内すれば何如なる僻遠の地に在りて束髪の風を知らざる人々も之に依て容易に自ら試るを得べし特に田口卯吉君の論文束髪會の規則其外をも添へたれば結髪改良に志ある人々ハ宜く一讀あるべし

中島湘烟女史著

●善惡の岐

定價金五拾錢 繪入美本

●目次○野蠻とも言へ未開とも言へ實に太平の里なるべし○高島田にやの字の娘五分さかやきに無刀の浪士○紅潮端なく上る佳人の面○一樹の名花春動く初○谿間の淸流も繁都の泥水なりしを知らずや○雙腕の勇餘す所なく滿腹の智遺す所なし○撫松庵のみ能く撫松庵の胸中を知れり○痴夢情烟春月暗○誰知一滴愛情水散湧奔波激浪來○世上の功名炭塵に異ならず○錢嚢瘦腹裡飢以て天下の經濟を論ず○貧生の慷慨特に足らず○當路の君子にして袖の下を嫌ふものはあらじ○双蝶花よ戯れて春情あり○歡樂のある處悲愁の伏する處○姉妹の談濃かにして春窓の燭微かなり○怨もなく怒もなきは交りと愛と共に新なるによる○撫松庵が胸邊寒く吹き送る巖間の風ゞ腥し○世難海より深かく人情紙よりも薄すし○會離緣あり應報爭ふべからず○優なる哉水聲人事の齷齪を嘲る○情人の艶話唯閑雲の聞くあるのみ○上帝親なく唯善人に與みす○客窓淚あり孝子の情○茲に因ありて茲に果あり○人間の歡樂一場の夢○墜葉翻つて力なく嬾禽啼て恨あり○地下の白骨士いまだ冷かならず病窓の美人恨愈多し○開花原是落花風○人の死する其言ふとや善し。

●賣捌○本社、銀座博聞社、原金港堂

統計局次長世良太一君序○統計協會議員吳文聰君序
通今居士横山雅男君著

●婚姻論

定價金三十五錢 郵税十四錢

此の書は通今居士横山雅男君の著にして全編を二十八章に頒ち總論。婚姻の定義。婚姻は人類の天性。婚姻の効力等より說き起し早婚。晩婚。私婚。血族婚。離婚。一夫一婦の正婚など悉く歐米の統計上より論及し議論正確文章平滑一讀我國嘗來蠻風の結婚を改良すべきの必要を感するの書なり

發兌 東京京橋區日吉町八番地 **女學雜誌社**

Digitized by Google
Original from CORNELL UNIVERSITY

生徒募集廣告

●通學生百名寄宿生貳拾名入學ヲ許ス但シ年齢十一才以上ノ者ニ限ル●學科ヲ別テ豫科及ビ本科（各二年ニテ卒業）トス又撰科生ヲ設ケ所定ノ課目中或ル學科ノミヲ撰脩スルヿヲ得セシム○敎員ハ重モニ大學校ヲ卒業シタル數名ノ英國婦人ナリ但シ專門學ノ講義ハ帝國大學敎授ニ之ヲ依囑ス○東脩ハ之ヲ要セス○普通科ノ授業科ハ毎月金貳圓五拾錢但シ洋琴ヲ學ブ者ハ別ニ金壹圓ヲ納ムベシ○寄宿料ハ毎月金拾五圓但シ外國敎師同様ノ寢食ヲ為サシム○入學志願ノ者ハ當館事務所ヘ申込ムベシ

麴町區永田町二丁目廿番地女子敎育獎勵會

私立 東京女學館

私立明治女學校生徒募集

學年試驗相濟候に付最下級（三十名其他欠員有之級に限り入學を許す八月三十日迄に學業履歴書を添へ郵便にて申越さるべし在地方の人々には右書狀に據つて入學の出來べきや否やを答述すべし

東京飯田町三丁目卅二番地

明治女學校

開校及入學試驗廣告

●來九月より始まる學年生徒入學試驗九月七八の兩日に執行すべし○他校にて修業せられし方は其校の證書を持參あるべしさすれば試驗を要せずして相當の級に編入すべし

●授業は九月六日を以て始むべし

明治二十一年八月

横濱山手百七十八番館

フェリス女學校

看護婦生徒召募廣告

看護婦生徒拾貳名試驗ノ上募集ス志願ノ者ハ來ル九月三十日迄ニ願書差出スベシ

但年齢廿五歳以上三十歳以下獨身ニシテ身躰强壯ノ者ニ限ル○委細は參院の上聞合はすべし

撿查概目

讀書、本所規則書並ニ飜譯文作文、通常書翰往復算術、加減乘除

明治廿一年八月十五日

東京慈惠醫院看護婦教育所

生徒募集廣告

今般本學暑中休業後ノ始業ニ際シ一層規模ヲ擴張シ學士數名ヲ增聘シ益獨立女學ノ進步ヲ計レリ依テ今般寄宿通學生百名ノ入學ヲ許ス有志者ハ來卅日迄ニ申込アレ

芝櫻田兼房町

私立 東京女學

會員諸君に稟告す

來る九月一日（第一土曜日）午後一時より神田區一ッばしそと高等中學校ない大學かうぎしつに於てそうくわい相ひらき候に付き御家内ともだち御つれだち御操合せ御あつまり相なり度ねがひ上候

當日からし演だいは

（演題未定） 長井長義君

（仝 ） 櫻井郁次郎君

京橋區日吉町八番地

私立大日本婦人衛生會事務所

在米の米人學士

よして特に日本の敎育に盡力せんと欲するものあり月俸百圓及び家族住居の家を用意せらるゝものあらば條約の上速に渡來あらんとす而して令夫人は音樂に長ず又無報酬にて夫人と共に其校に盡力あるべし右學士の學力及び篤行に關しては女學雜誌社員が保證する所なれば日本敎育の為に之を紹介するもの也志あらん方は來談を乞ふ

巖本善治

遞信省認可

クレームシモン廣告

クレームシモンハ巴理ノ最モ名醫ノ勸メル所ニシテ美麗ナル婦人ハ皆是ヲ用ユ、此藥ハ他ニ其類ナク一夜中ニ面胞(ニキビ)、胼(ヒビ)、寒瘡(シモヤケ)其他皮膚一切ノ出來物ヲ治ス又皮膚ヲ白クシ強クシテ且香氣ヲ添ユ

プードルシモン(粉)サボンアラクレームシモンノ著シキ功能ヲ全クステクレームシモンハ共ニ同シ香氣アリ

一手賣捌　横濱五拾一番　ア、キユルチー

朝倉山椒入味淋最上醬油製

あけはのあゝみ

滋養品貝類之一等

日數五十日請合
壜詰金十錢ヨリ
曲物入金七錢ヨリ

東京隅田川筋の名物御藏蜆右一名曙蜆の儀貝類の一等御滋養に相成殊に良品に付發賣仕度事を多年願望の處漸々にして此度新發明致風味專一に精制し發賣仕候間何卒不相變多少共御用向の程一偏に奉願上候尙又佃煮座禪豆其他諸品共御重箱詰曲物等御好次第精々念入調進奉差上候

淺草茅町　玉木屋與吉　敬白

製造元河內國道明寺村南坊城良輿

名産　道明寺糒

大販賣所　東京淺草茅町　佃煮座禪豆舗　玉木屋

發兌	定價	廣告
七月。七日　十四日　廿一日　廿八日	一册。五錢　郵稅。一錢（但府內無郵稅）	特別廣告は婦女に關する協會會合等の記錄を掲ぐるものにて一切無料とす但し紙面半頁分の廣告を載する毎に右雜誌十部の注文を要し以上半頁分毎に十部增の割合と定む
八月。四日　十一日　十八日　廿五日	十册。四十八錢郵稅。十錢（同前）	一行　一回（廿七字詰）前金拾錢
九月。一日　八日　十五日－廿二日　廿九日	半年分　一圓十七錢　府外は　一圓四十三錢	同　三回以上　一割引 同　六回以上　二割引
十月。六日　十三日　二十日　廿七日	一年分　二圓卅四錢　府外は　二圓八十六錢	十行以上一割引。二十行以上二割引。四十行以上三割引。但し不道德なる事物の廣告は謝絶す有益なる事物の廣告は社議の上無代價にて引受く女學關係の書籍は一部の寄送を乞ひ相當の廣告をなし且つ本誌に批評すべし

女學雜誌賣捌所

東京神田區淡路町駿々堂○同芝西久保櫻川町萬春堂○同神田區雉子町團々社支店○同神田區佐柄木町東海堂○同日本橋區新葭町良明堂○同京橋區木挽町壹丁目萬字堂○同本郷區元富士町盛春堂○同本郷區春木町二丁目解明堂○同本郷四丁目文壽堂○横濱住吉町角田晏貞○同太田町三丁目萬字堂○同日月堂○同本町六丁目日の出屋○京都四條通小橋西へ入淨集光堂○同三條通東洞院西へ入クリスチアンボード○大坂備後町四丁目岡島支店○仙臺國分町十五番地伊勢安雜誌部○宮城縣仙臺大町木村文助○尾張國名古屋本町○石版社○出雲國松江新町盛進堂○廣島縣大手町一丁目早速社○長崎酒屋町虎與號○江州彦根西內大工町新々堂○相州小田原綠町石壽堂○上州高崎田町煥乎堂○土佐國高知本町三丁目樂園堂○熊本文明堂

明治二十一年八月廿三日印刷
明治二十一年八月廿五日出版

發行所　東京京橋區日吉町八番地　女學雜誌社

編輯兼發行人　東京京橋區日吉町八番地寄留　巖本善治

印刷　東京芝區源助町十一番地寄留　森田豐

WOMAN'S MAGAZINE.
"JOGAKU ZASSHI."
Price 5 *sen*. By post *yen* 1.43 six months, *yen* 2.86 per annum, in advance.
Edited and published by Y. H. Iwamoto, at The Jogaku Zasshi Office, No. 8B HIYOSHICHŌ, SHINBASHI, Tôkyô, Japan.

Digitized by Google　Original from CORNELL UNIVERSITY